

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第17回 ウガンダで話されている・使われている言葉

カンパラに住み、ウガンダを旅行すると、日本人になじみの「言葉の読み」つまり日本語の音と遭遇します。例えば、私が住んでいて、このカンパラ通信の副題にもしていますナカセロですが、「泣かせろ」と書くと NAKASERO より分かりやすくありませんか。ナカセロには大きな青空市場がありますが、当地の古い言葉でナカセロは大きな籠を意味することです。カンパラは丘がたくさんあり、そのうちの一つがナグル(NAGURU)の丘で新興住宅地になっています。ナグルというと「殴る」に通じますよね。さらに、ナイルの源流があるジンジャという町もあります。日本人なら「神社」とすぐに結びつけるでしょう。その東隣にマユゲという町があります。私達日本人にはまさに「眉毛」ですね。カンパラの西隣の町は、まさかと思うかもしれませんが、マサカといいます。日本のことを知るウガンダ人は、私たち日本人と初めて会った時に、このような例を挙げて日本語とウガンダの言葉の音が近いといった話題から入ることがよくあるようです。

ということで、今回は、親しみを込めてウガンダの言葉を取り上げてみます。



ナカセロ青空市場の風景



ナイルの源流ポイントがあるジンジャ

ウガンダは、長い間英国の保護国となっていたためか英語がよく通じます。小学生になると学校では英語で授業が行われ教科書も英語で書かれていますので、多くのウガンダ人が英語をよく話し、事実上共通語となっています。しかし、現地人同士では自らの部族語で話しをしています。首都カンパラは、ウガンダでも最大の部族であるガンダ王国のテリトリーにありますので、ガンダ語が多く話されています（ウガンダという国名自身がガンダ王国を主体にして出来上がったという歴史的経緯を表していると言えます。）。もちろん、現地語であるガンダ語の新聞も発行されていれば、ガンダ語放送のTV局もあります。ウ

ガンダには全部で52の部族がいると言われ、各部族がそれぞれの言葉を持っていて、話されています。日本も47都道府県ありそれぞれの都道府県で方言があることに似ていますね。では、これら部族間の言葉が全て全然違った言葉かということはありません。似通った言葉は少なくありません。訊いてみますと、ウガンダの中央部から東部や西武・西南部の人々は自分の部族の言葉で他の部族の人と話しをしてもそこそこ通じるようです。しかし、彼らの言葉が、北部の人々に通じるかという北部の言葉とは大きく異なるようで、意思疎通が成り立たないといえます。去る11月8日に放送された日本テレビの「笑ってこらえて」の番組で、カンパラから日本の取材陣と一緒に北部のグルに向かった日本語が堪能な現地案内人がグルの村で全く英語が通じず困惑する場面がありました。そのウガンダ人の案内人は英語が話せない北部の現地人と意思の疎通ができず、お互いの部族の言葉も通じずで案内人の彼が現地で英語から北部の現地語への通訳を必要とする場面がありました。案内人のウガンダ人は遠く離れた日本の言葉は話せるのに、同じウガンダ人と全く言葉が通じないので本当に驚きました。



(写真3 : ウガンダの言語分布)

さて、言語の専門家に言わせると、アフリカ全体の言語グループは大きく分けると下記の4つに区分されるそうです。

- アジア・アフリカ語族グループ＝エジプトを含む北アフリカやエチオピアで話されています。
- ニジェール・コンゴ語族グループ＝アフリカのサブサハラ地域を広く占める地域で使われています。
- ナイル・サハラ語族グループ、＝ナイル川流域とサハラ砂漠を中心とした地域で話されています。
- コイサン語族グループ＝アフリカ南部がこのグループです。

この分類に従うと、ウガンダの場合は、大きく分けてニジェール・コンゴ語族グループに属するバンツ系諸部族語が話される地域と、ナイル・サハラ語族グループに属するナイロティック系部族語が話される地域に分かれるようです。

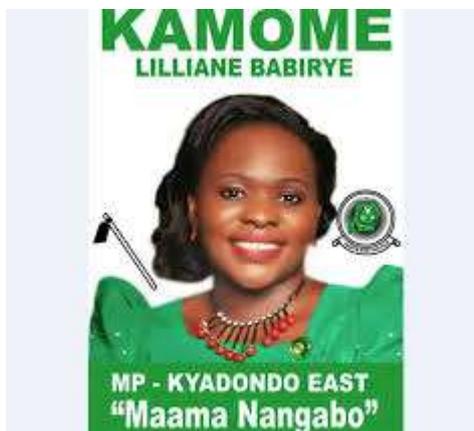
これら二種類の言語グループの分布が上の方で述べた現実と言語が通じ合う地域の境界線とほぼ合致するという訳です。これら二つの言語グループの違いは、民族の違いにまで通じ、英国の保護下にあった時代はもとより独立直後のウガンダの政治的な不安定を説明する重大な一要因となっています。

皆さんはアフリカでの言葉と言うとタンザニアやケニアで良く話されているスワヒリ語を思い浮かべるのではありませんか。ウガンダではスワヒリ語が憲法上第2公用語にされているにもかかわらず、ほとんど話されていません。かといってウガンダの中央部に居住する最大部族のガンダ族が話すガンダ語も周辺の部族の警戒・反発があって共通語とならず、英語が憲法上ウガンダの公用語とされ、実際上もそのような役割を担っています。国歌の詞も英語となっています。

ところで最初に戻って、日本語でも見られる単語の音がウガンダでも少なからず見られると申しますか聞き取れるのは、母音が重なったり、子音が重なったりした単語がほとんどなく、原則としては子音と母音とが組み合わさった形となっているからでしょう。つまり日本語で申しますと「あいうえおの五十音」の音で単語が成り立っているからでしょう。英語でよくある微妙な母音の違いはウガンダ人でも苦手なようです。Ndere Centre(カンパラ通信第3回で少し触れています。)のダンス・ショーでの軽妙な司会・進行係をするスティーブンは、ウガンダ人が「heart」と「hurt」と「hat」を区別することができないことを捉えて、まず観客から欧米人を選んでこれらの単語を発音してもらい、それに続いてウガンダ人観客に同じことをしてもらうのですが、ウガンダ人の発音はみんな同じように聞こえるといって揶揄うのです。私達日本人も「heart」「hurt」「hat」なんて英語のテストの発音問題に出て来そうなことは分かっているながらも、スティーブンから区別して読んでくださいと急に言われても上手に発音できそうもありませんよね。公用語が英語のウガンダの人も私達と同じなのか！、とちょっぴり親しみを感じませんか。

さて、ウガンダには、驚くなかれ地名に限らず人の姓でも日本と同じ姓の音があるのです。「Kato(加藤)」さん「Nakato(仲戸)」さん「Baba(馬場)」さんが代表例です。環境担当国務大臣とラグビーのスター選手の苗字はなんと「Kimono(着物)」さんなのです。ある政党幹部のある人の姓が「Kamome(カモメ)」さんだったりもします。逆に「Tanaka(田中)」というのが、ガンダ語では「吐く」という意味だったりして、田中さんが自己紹介の時に笑われることもあります。当館館員の中につい最近まで健太郎さんがいましたが、これはアンコーレ語では「戦争」という意味になるそうです。でもすぐに名前を覚えられてよいか

もしもありませんね。そういえば、ウガンダの男性売れっ子流行歌手に「Kenzo」という人がお
ります。わたしは、ついつい著名デザイナーの高田賢三を思い浮かべてしまいます。



ウガンダの“わたしはカモメ”



ウガンダの賢三さん

以上のような理由からウガンダの地名を読むのは簡単なのですが、ひとつ注意しなければ
ならないことがあります。ウガンダでは、「Kya」、「Kyi」、「Kyo」はそれぞれ、「チャ」、「チ
ュ」、「チョ」と発音されることです。ですので、東京や京都のことをウガンダの人々はト
ウチョ、チョウトと呼ぶのです。最初は少し戸惑いましたが、今ではすっかり慣れました。
同じように「京子」さんは、「チョウコ」さんと呼ばれてしまいます。

どうでしょう皆さん、日本語とウガンダの言葉の音の共通点を見つけながらそして文化や
表現の違いを思いながらウガンダを旅し現地語を覚えていくのも面白いかもしれませんね。

(以上)